

博士学位論文

ギヤスケル文学における母娘関係と女性の生き方 ——女性の持ち場と価値観の変容——

名古屋大学
国際言語文化研究科
国際多元文化専攻
ヨーロッパ言語文化講座
学籍番号：531202020
木村正子

平成26年3月

目次

序論	1
第1部 女性の活動源としての母性 — 母の言葉と行動	
第1章 嘆きの母から救いの母へ — 『メアリ・バートン』	
1. 母の嘆きと『メアリ・バートン』	16
2. 母の沈黙と娘の危機	19
3. 父による愛情と共感の拒絶と野獣化する息子たち	27
4. 母の教えによる、娘の成長と父の変化	31
5. 母による救済のメリットとデメリット	35
第2章 〈堕ちた女〉の物語とヒロインの死 — 『ルース』	
1. フィクションに描かれる〈堕ちた女〉	38
2. 二つの顔を持つルース	43
3. ルースの更生 — 母性がもたらす生産的な力と否定的な効果	48
4. ルースの死	53
5. 〈堕ちた女〉の問題のゆくえ	59
第2部 女性の活動領域の拡大 — 私的領域から公的領域へ	
第3章 母の教えと女性のコミュニティの意義 — 『クランフォード』	
1. 精神の後継者を求める場としてのクランフォード	62
2. クランフォードの町におけるマナー・ゲーム	65
3. 女性の教育 — 〈女性らしさ〉か男女同じか	73
4. 進化するクランフォード — 男女の領域の曖昧化	77
5. クランフォードの今と次世代	81
第4章 ヒロインは眠らない — 『北と南』	
1. シェヘラザードとワシテ	83
2. 文化的ハイブリッドのマーガレット	86
3. マーガレットと三人の〈母〉たち	88
4. マーガレットの「男性的な生き方」	95
5. ヒロインの自立と自己充足	102
第3部 女性の沈黙と言葉 — 言葉を失う女性と言葉を操る女性	
第5章 女性の教育と沈黙 — 『シルヴィアの恋人たち』	
1. 沈黙するヒロイン	104
2. 女性の飼いならし — 男性の言葉に縛られる女性	109
3. シルヴィアのボイスとそのゆくえ	113
4. 『シルヴィアの恋人たち』が継承したものと譲渡したもの	122

第6章	ゴシックにおける女性の二重空間 — 「灰色の女」	
1.	ギヤスケルと「女性のゴシック」	129
2.	「灰色の女」における〈犠牲者〉の擬装と女性のデーモン	132
3.	母の言葉と娘の沈黙	137
4.	ゴシックからセンセーション小説へ	146
第4部	自己を演出する女性たち — 天使の仮面と男性の仮面	
第7章	女性の義務と演技 — 『妻たちと娘たち』	
1.	〈母〉殺しと『妻たちと娘たち』	149
2.	モリーの物語—母たちのボイスと娘の葛藤	152
3.	ミセス・ギブソンの物語 — 女性の演技と擬装	158
4.	シンシア — 「ヘッドレス」コケットの擬装と演技	164
5.	母の復活 — モリーの成長とエーメの登場	169
第8章	ギヤスケルと娘たち — エリオットとウルフの作品に見る ギヤスケルの遺産	
1.	ギヤスケルからエリオット、そしてウルフへ	173
2.	娘による、母の教えの受け入れと拒絶 — 「荒野の家」と 『フロス河の水車場』	175
3.	フェミニストの娘の主張 — 『灯台へ』	182
4.	女性と言葉	191
結 論		194
注		205
参考文献		213

博士学位論文

ギヤスケル文学における母娘関係と女性の生き方

——女性の持ち場と価値観の変容——

木村正子

本論文は、エリザベス・ギヤスケルの作品における母と娘の関係を軸にして、作品内における女性の持ち場、価値観の変容を読み解くものである。オースティンを先駆者とする女性作家の作品では、ヒロインが失敗を経験しながら精神的に成長し、結婚という〈幸福な結末〉に向かうのが定番の筋書きである。この類型においては、ヒロインの結婚は父の代替となる男性の導き手を得る通過儀礼であり、母が娘の成長に寄与するものは金銭的な援助以外ない。しかし、ギヤスケルは母を無視／疎外するパターンに否を唱え、母の存在と力が娘の成長に不可欠であるというプロットを提示した。そこからは、女性の人生を男性による支配から解放し、女性の教育を担うのは女性であるという訴えが読み取れる。この方向転換により、ヒロインの物語は母と娘の関係の改善、そして女性同士の連帯や女性が行行使する影響力を強調した物語に変容した点に、本論文は着目している。

ギヤスケル作品における母の役割や価値観は、ヴィクトリア朝女性のアイコンである〈家庭の天使〉が象徴する自己犠牲と他者利益の精神を受け継いだものである。これは、当時の社会が容認する女性の活動および活動領域を逸脱することなく、社会（公的領域）における女性の活動を可能にするために、ギヤスケルが用いた方便とも言える。しかし、ギヤスケルは既存の社会システムを否定せず、インフラの整備によって使い勝手のよいものに変えることを提案している。男性社会が階級や地位や財産などを尺度にして人々を分類・分断・細分化したのに対し、ギヤスケルは社会における女性のケア活動（本論文の鍵語となる「マザリング」）を前景化することでコミュニティ内での「まとまり」や「繋がり」を重視しているというのが、本論文の主たる主張である。

序論では、ギヤスケル作品の位置づけと従来のギヤスケル批評が取りこぼした点の指摘に続き、本論文の論点とその独創性が述べられている。20世紀後半までのギヤスケルと彼女の作品についての評価は、「典型的なヴィクトリア朝女性」が書いた「その時代以外には通用しない」ものであった。これは、キャンノンによる19世紀女性作家の作品の評価がジョージ・エリオットの作品を試金石としてなされ、男性作家の作品に準じるものでなければ評価の対象にならなかったことが原因である。そのためギヤスケルの作品は作者の死後100年間ほど無視され、それらの読み直しと再評価には従来とは異なる評価基準が必要であった。その読み直しに大きく貢献したのがフェミニズム批評である。本研究もフェミニズムの視点による批評に負うところが大きい。しかし、フェミニズム批評もまた、母と娘のどちらの視点に立つかにより、女性の生き方の捉え方が大きく異なってくる。ギヤスケルのように母と娘の双方の視点を持つ場合には、母か娘かという二元論ではなく、娘から母になって立場が逆転した場合はどうなるのかという点を議論しなければならない。母と

娘は別個の存在でありながら、同時に一人の女性が人生において経験する二つのステージ／側面である点を捉えることが必要だからである。

第1部では、母の力（特に母性）に注目し、母性を活用する上でのメリットとデメリットに関して、二つの作品を用いて論じている。ギヤスケル作品の出発点は、「慈しみ、育てる」という母性的な視点に立ち、娘の成長に寄与する手段や方法を模索することであるが、その後は母性的価値観に基づく考えや行動によって家庭の育児活動を社会における人間の精神的育成活動へと応用している点が顕著になる。

第1章は、『メアリ・バートン』において母が不在のヒロインと親方に見捨てられた労働者とを相似形に見立て、保護（者）を失くした子供が受ける被害について考察している。両者を比較すると、娘の淪落とストライキ時における労働者の暴徒化は、いずれも母による世話や教えが欠落した結果であり、ギヤスケルは男性の価値観ではどうすることもできない〈子育て〉の行為を女性の価値観で補填することを試みたと解釈できる。これは、家庭内の育児活動を応用して社会活動へと拡大する点で、母性を女性の活動源として有効活用した成功例である。

第2章の『ルース』論は、〈堕ちた女〉に対してどのように更生の機会を与えるべきかを論じる。『メアリ・バートン』と同様に、本作品も母性が女性の活力を引き出す源である点を強調しているが、同時に、母となった女性には〈母親〉以外の役割を認めないという母性活用のマイナス面が生じることも指摘している。

第2部は女性の価値観に基づく社会的養育に焦点を当てる。ここでは、未婚のヒロインが〈父の娘〉から解放され、男性の被保護者の立場から自立した女性へと変容することを通して、女性に拓かれる活動の場が分析されている。

第3章では、『クランフォード』において中高年の中産階級の女性が支配する町の意義が考察される。この町の女性たちは一見すると亡き男性たち（父や夫や兄弟）の影に縛られて自立性を持たないように思えるが、事ある時は女性の連帯によってコミュニティ全体で問題を解決しようとする。そこには、おのずと年代や階級や出身地という境界を超えた異文化交流の場が発生し、直系男子による嫡子相続の家父長制とは異なる家族観や社会の形成の萌芽を見ることができる。

第4章の『北と南』論はヒロインが複数の文化を横断し混成文化形成の役割を担う点について論じている。本ヒロインは本拠地を持たないがゆえに立場や価値観や行動に柔軟性を持つ女性であり、彼女が提示する新しいロール・モデルは、女性にも強い意志と資金があれば、男性の領域である社会で自由に活動できることを暗示している。

第3部では、女性と言葉との関わりに注目し、男性（あるいは男性社会）がどのようにして女性を沈黙へと導くのか、そして女性は自分の言葉を得ることができるのかという点が考察されている。

第5章の『シルヴィアの恋人たち』論は、国家権力のもとに言葉を奪われる人々と、男性支配のもとに沈黙を強要される女性とが、相似形として描かれている点に注目する。支配者の言葉はその真偽が検証されないまま事実として受け入れられて記録として残る一方、被支配者の思いは第三者の想像に委ねられて放置される。この作品は、女性の沈黙を悲劇

的状況と見なし、その打開のためには女性間のコミュニケーション／情報の共有が不可欠であると訴えたものとして読める。

第 6 章はヒロインがペンを武器として言葉を操る中篇小説「灰色の女」が分析対象となっている。この作品は、ゴシックという枠組を用い、現実から遊離した空間では女性の怒りや憎しみといった激しい感情を自由に描き出すことができることの実例である。言葉の上ならば自身の人生の改竄も可能であり、そこにこそ異空間設定の意義を読み取ることができる。

第 4 部では、女性が男性の気を惹くために行う自己演出と、女性作家が男性名を名乗って男性のボイスを真似る擬装が相似形であるという仮説を立て、それを実証している。男性優位の結婚市場において女性は男性の視線を制御して自身に有利な状況を作り出すが、それは表裏一体の弱点も抱えている。女性は自己を捨てて他者が望む姿を演じ続けることになるからだ。それはまた男性名を筆名とする女性作家の立場に通じるものである。

第 7 章の『妻たちと娘たち』論では、母と娘の関係が対立から調和への模索という形で分析される。ヴィクトリア朝社会の家族観においては、親子関係よりも夫婦間の絆が重んじられたため、母と娘の間柄も疎遠なものが多い。母親の役割は乳母やガヴァネスや代理母（に相当する人物）によって代替可能であるが、この作品は母の愛情を求める子供に対してどのような支援が必要なのかを問うものとして解釈できる。

第 8 章では、ギヤスケルと後輩作家であるジョージ・エリオットおよびヴァージニア・ウルフの作品が比較され、これら文学上の娘たちがギヤスケルから何を受け継ぎ、何を拒否したのかが考察されている。「荒野の家」と『フロス河の水車場』の比較分析は母による娘の救済を訴えるギヤスケルと男性による娘の救済に頼るエリオットとの相違を、ウルフの『灯台へ』における母娘間の葛藤についての分析は、母と娘が真っ向から対峙する必要がある点を、それぞれ明らかにしている。

以上の各論から、本論文の結論では、ギヤスケルが伝統的に無能化されていた母を前景化し、母の力を有効活用することによって娘の成長に寄与する物語を提示した点を強調している。だが、同時に、その母の力の有効利用の限界、すなわちギヤスケルにも不十分な点があったことが指摘される。彼女は母と娘の双方の視点で作品を書いたが、最終的には娘の視点を選んだことで、母は娘に譲歩するという従来のパターンから脱することができなかった。しかしながら、ギヤスケルは最後まで母という存在を切り捨てず、女性の物語や歴歴史において過去・現在・未来の連続を意識した物語を紡ぐことに終始した。それが母と娘の繋がりを断ち切らせない、換言すると、女性の物語の断片化を避ける方法であったのである。